2025 年3月 9 日 受難節第 1 主日礼拝メッセージ

「つきまとう悪魔」　　水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 4章 1－11節

マリアとヨセフという夫婦のもとに、聖霊によって授けられ、クリスマスの日に生まれたイエス・キリストは、30 歳ごろに、そのころヨルダン川で洗礼を授けていた洗礼者ヨハネから洗礼を受け、神様のことを宣べ伝え始めます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。そして、人々に神の国について教え、ある時は病人をいやし、またある時は形だけの信仰生活に満足していた宗教的指導者や権力を振りかざして威張っているばかりの政治的指導者たちを厳しく批判していきました。当然それは底辺の民衆には大きな支持を得る一方、権力者たちからは煙たがられたわけです。そしてイエスさまが活動を始めて約 3 年後の今頃の季節、「過越の祭」というユダヤ教の祭の前日に、イエスさまは弟子の一人であったイスカリオテのユダによる裏切りによって逮捕され、連行された後、有罪にするための形だけの裁判によって死刑が告げられました。そして拷問や辱めを受けた後、十字架を担がされて刑場に連れて行かれ、そのまま 磔(はりつけ) の刑によってイエスさまは殺されてしまったわけです。イエス・キリストのこの世の生涯としてはそこまでなのですが、しかしその 3 日後に、イエスさまが墓から復活したという目撃者たちの証言から、「あのナザレのイエスこそ、まことの救い主、神の子であったのだ」という思いが、現在の私たちのキリスト教となっていきました。そしてご存知のように、そのキリストの復活の日を私たちはイースターといってクリスマスと並ぶ大事な祭日としているわけです。

そして、そのイエス・キリストが十字架から復活するに至るまでのある一定の期間、キリスト教界ではイエスさまの受けられた数々の苦しみ――裏切られたり、殴られ鞭打たれたり、つばを吐き掛けられたり、いばらの冠をかぶせられてばかにされたり、重い十字架を担いで引き回されたり、手足に釘を打たれ、わき腹をやりで突かれたり――、十字架で殺されるまでの本当に多くの苦しみのことを覚えて、私も当時あの場所にいたなら「十字架につけろ！」「バラバを釈放しろ！」と叫んで、イエスさまを十字架につけてしまった側にいたかもしれない、そうでなくとも、自分の身を守るために何も言えずにイエスさまを見殺しにしてしまったかもしれない、知らんふりをしてしまったかもしれない、ゴルゴタの丘にすら近寄らず逃げてしまっていたかもしれない、イエスさまを十字架につけて殺したのは、他でもないこの私だったのかもしれないのだ、という悔い改めの祈りのうちに過ごすことが伝統的になされてきました。そのように、キリストを十字架に追い込んで殺してしまった人々と何ら変わることのない自分の罪を思って悲しみと悔い改め、そして復活による救いを待ち望む祈りをささげつつ過ごすのが、先週の水曜日から突入した「受難節（レント）」という期間、四旬節とか最近では復活前節とも呼ぶようになっていますが、その「イースターまでの日曜日を除いた 40 日間」であるわけです。

しかし、実際のキリスト教会の歴史においては、レントは 2 世紀ごろから始まった受洗準備の習慣に由来すると言われていて、初めは任意で、期間も 1～2 日でしかなかったのだそうです。それが、西暦 325 年のニケア公会議――現在のトルコにあたる場所で行われた、キリスト教の歴史において初めての、全教会規模の会議――の際、「40 日間」というレントの期間が公式に定められたというわけです。では、そのレントが何で「イースターまでの日曜日を除く 40 日間」などとややこしい設定になっているのか。レントというのはイエスさまの受難と死を思いつつ、断食や祈りのうちに過ごす期間であるけれども、その一方で日曜日というのはイエスさまの復活を記念する主日ですから、主日にそんな辛気臭いことはよくないから、日曜日はレントの期間に入れないことにしよう、ということであったようです。そして「40 日間」というのは、ご存知のように、イエスさまが荒れ野において誘惑を受けられた日数や、出エジプトの荒れ野の 40 年にちなんだものであるわけです。

さて本日は、「キリストの荒れ野の 40 日」すなわち、キリストが霊によって荒れ野へ導かれ、悪魔から誘惑を受けるという箇所です。カトリック教会や東方正教会などで今でも受難節に断食をする習慣があるのは、この 40 日の断食にちなんでいるのかもしれません。私たちプロテスタント教会では、灰の水曜日に特別な儀式をしたり、レントの間に断食を行ったりする習慣はあまり見られないですが、私は以前、このレントという期間、断食とまでは行かなくとも、「自分の好きな物を絶つ(減らす)」とか、何か自分で目標を立てて苦行をしてみるのも、キリストの苦難を自分も分かち合うという意味で意義深いことかもしれないと思って、例えば断食をしてみたり禁煙してみたり、あるいはそのようないわゆる苦行を信徒さんへも勧めてみたりしたこともあったのですが、現在はレントにあたって改めてそのこと――キリストの苦難を分かち合うということ――を考えた時に、いややっぱりそれも違うかもしれんなという気がしています。

例えば、有名な「リオのカーニバル」なんかは、受難節に入ると断食したり肉を食べれなくなったり、つまりおとなしく生活をしなければならなくなるために、その前にどんちゃん騒ぎをしておこうということで始まったお祭りだったような気がします。もちろん、カーニバルも今や宗教的な意味合いはすっかり薄れてしまっていますし、楽しんでいいんだと思います。お祭りですから。レントに入ってもいないのに、喪に服すみたいに辛気臭い生活する必要はない。あれはあれでいいんですけども、ただ、私たちが「レントだから断食でもしてみようか、キリストの苦しみを分かち合うために何か苦行をしてみようか」「レントだから大人しく謙虚に」と考える時、それは「まだレントじゃないから大丈夫」とか「ああしんどい、イースターまでまだ何日残ってる、レント早よ終わらんかな！」「レントさえ過ぎてしまえば、自由にやっていいんだ」っていう肉の思いと表裏一体なのではないか。もちろん、だから全く意味がない、とまでは言わないけれども、そんな形ばかりの受難節の過ごし方であれば、むしろもう苦行など何もせずにいつも通りでいた方がよっぽどいいのでは

ないかと。そんなふうに私は自分の経験上思ったりしてしまうわけです。
さて、今日の聖書によると、イエスは 40 日の断食を終えた後、空腹を覚えられたとあります。イエスさまも 40 日もの断食をやり遂げて、ほっとしたのかもしれません。しかし、私たちの日常においてもそうなのですが、そんな安心した瞬間こそが一番危ない。まさに「家に帰りつくまでが遠足です」。悪魔はイエスさまが家に帰りつかないうちにすかさず、親切そうに言うわけです。「神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ」。お疲れさん。お腹すいたろう。あんた神の子なんだから、そのへんにある石をパンに変えて、空腹を満たしなさいよ。これは、私たちを楽な方へ楽な方へと引き込もうとする誘惑、手間や努力を省いて広い門、滅びに通じる門へ導こうとする誘惑なのかもしれません。例えば今も昔も子育てや教育の現場における様々な体罰の問題があります。教え子が自分の思う通りにならないと殴ったり、「死ね」とか「やめてしまえ」とか罵ったりする。なんでそんなことが言えるのか。言葉で丁寧に諭したり励ましたりするよりも楽だからです。私だって、子どもを殴ったりしたことはありませんが、自分の機嫌によって威圧的に声を荒げたりすることがあったことを思います。それは一時的にでも、石がパンになるからです。子どもたちは殴られたりどやされるのが嫌だから、しぶしぶ、あるいは必死になって従うんです。きっとその時の私の顔は、悪魔の誘惑に乗ってしまった本当に醜い顔をしていたと思います。しかしそんな私たちと違ってイエスさまは「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」といって、そんな悪魔の提案を却下するのです。
次に、悪魔がイエスさまを神殿の屋根の端に立たせて「神の子なら、飛び降りたらどうだ。『神があなたのために天使たちに命じると、あなたの足が石に打ち当たることのないように、天使たちは手であなたを支える』と書いてある」と言いましたが、ここでも誘惑する者は「楽」と闘う私たちに言うのです。「このへんで無理な努力は止めたらどうだ。失敗したって、神があなたを罰することはなく、むしろそんな弱いあなたを支えて下さるよ。きっと」と。しかしそんなことは分かっているのです。私たちが、自分が志したことを完結できず失敗したとしても、神様はきっと許してくださる。そういう弱い私を哀れんでくださり、助けてくださる。それは分かっとるんです。だからこそ、そのことを改めて確認するかのように何かを誓ってみたりあきらめたりすることは、神様の愛を試すような不誠実になるのではないのか。それを私たちは恐れ、避けないといけないのではないでしょうか。
そしてさらに悪魔は、イエスさまを高い山に連れて行き、世の全ての国々とその繁栄振りを見せ、「もし、ひれ伏して私を拝むなら、これをみんな与えよう」とイエスに言います。それに対してイエスさまは「退けサタン。『あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ』と書いてある」と答えるんです。この時イエスさまは、きっとすごく悩んだと思います。悪魔が高い山に連れていって、この世の全ての国々とその繁栄ぶりを見せたその時、イエスさまはきっと全ての国々の様子、そこで暮らす人々

の様子もご覧になったことでしょう。そしてそこでは、幸せに暮らす人々もおったでしょうが、イエスさまがそうやって見た国々の人々の中には、その繁栄ぶりを謳歌している幸せな人たちの中で、あるいはその足元でうずくまり這いつくばっている、しんどい人々のことも見えてしまったかもしれない。悪魔が「ひれ伏して私を拝むならばこれをみんな与えよう」って言った時、だからイエスさまはきっとすごく悩んだと思います。悪魔にちょっとご自分が頭を下げさえすれば、その世界は自分のものになる。自分のものになるっていうことは、幸せな人たちだけじゃなく今幸せでないしんどい人たちに対しても手を差し伸べることができるということ。ですからイエスさまは、そのしんどい人たちのことを見た時に、悪魔に頭を下げてでもその人たちのことを何とかしたいって思ってしまったかもしれない。イエスさまも大変悩んだと思います。

でも、そうやってちょっとでも悪魔に頭を下げた時、悪魔を拝んでいるつもりはなくとも、安易な誘惑に私たちが身を任せてしまった時、それは神に背を向け、悪魔に仕えていることと同じことになってしまうのかもしれません。そりゃあ悪魔にちょっと頭を下げさえすれば、自分の理想が手っ取り早く実現できるかも知れません。しかし隣人を裏切り、自分にも嘘をついて言い訳をして理想に近づくよりも、手間がかかって歩みは遅くとも、結果がなかなか出なくても、自分を信頼してくれている者、支えてくれている者の思いや自分の思いを大事に、大切にしていく方が、生きていてずっと気持ちいいのではないでしょうか。理想をかなえることも大事だけれど、神様も決して私たちの尻を叩いて結果を出せと急かすような事はなさらないはずです。私たちはいくら自分の思い描くものがすぐ目の前にあったとしても、安易な誘惑に身を任せることには、本当に気をつけないといけないことを思います。

最終的に、イエスさまが悪魔を退けることができたので、悪魔は一旦は離れていきました。しかし、悪魔は一度は離れても、いついかなるときにも私たちの心の隙を狙って、私たちを自分たちの仲間にしよう、自分に頭を下げさせよう、自分たちの支配下に置こうと付きまとってきます。私はホラー映画が好きで、よく悪魔払いの映画などを見るんですけど、最近の映画はなかなかハッピーエンドにはならないですね。女の子に取り憑いた悪魔を悪魔祓いによって追っ払って「めでたしめでたし」なんていう結末にはなかなかならない。すごい後味悪い、最終的に、なんや悪魔は全然負けてないやないか、むしろ悪魔に負けてるやないかというような後味悪い結末の映画が多いように思います。やっぱり現実はそんなもんなんだろうなと。悪魔は強いんですよね。私たちが思うように、そんな簡単に「サタンよ、退け」って言って、退いてくれるような悪魔ではないですから。今日のキリストのように強くない私、「楽」に流されやすい弱い私たちですから、レントに限らず、誘惑する者・悪魔が現れる度に「退け、サタン」「助けて神様」と祈りつつ、神の助けを求めつつ、歩んでいきたいと思います。